

機関番号：32607

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20592604

研究課題名 (和文) 母親役割への精神的適応過程における対処パターンに関する研究 II

研究課題名 (英文) The Study on Coping Pattern in the Maternal Adaptation II

研究代表者

島袋 香子 (Shimabukuro Kyoko)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：70206184

研究成果の概要 (和文)：

妊娠末期の初妊婦 30 名を対象に Stress Coping Inventory(SCI)、対児感情評定尺度、Japanese Prenatal Self-Evaluation Questionnaire(JPSEQ)を用いた調査と面接調査を行った。面接結果は、6つの主カテゴリー【 】と 26 のサブカテゴリー『 』、2つの関連カテゴリー< >に整理した。妊婦の SCI は、対決型と責任型が低い特徴があり、自己コントロール型の高い者は児への回避感情が低い傾向を示した。多くの妊婦は【自己の母親像】は、出産後でないとわからないと表現したが、『育てられ体験』や『理想像』から母親像を描こうとしており、母親役割準備高低比較では、『妊娠中の体験』に違いがみられた。この対処には<実母との関係><夫との関係>が影響していた。

研究成果の概要 (英文)：

We conducted questionnaire and interview surveys involving 30 primiparae in the last trimester of pregnancy. The survey included items on the scale for maternal feelings towards the child (developed by Hanazawa), the Stress Coping Inventory (SCI), and the Japanese version of Prenatal Self-Evaluation Questionnaire (J-PSEQ). The interview results were classified into 6 core categories <>, 26 subcategories[] and 2 related categories. The major findings were as follows:

1. The subjects tended to score low on “confrontive coping” and “accepting responsibility” on the SCI. Those with high scores for “self-controlling” tended to score low on items measuring negative feelings towards the child.
2. When asked about their <self-image as a mother> in the interviews, all the subjects answered that they were unable to figure it out until after delivery. Despite such [difficulties in developing a self-image], they tried to develop one by drawing on their [own upbringing] and [ideal self]. Furthermore, they were aware of [changes in themselves after pregnancy].
3. We compared preparedness for motherhood among those with higher and lower scores, the interview results showed differences in [experiences during pregnancy].

Furthermore, the relationships with maternal grandmothers-to-be and husbands appear to exert an influence on the coping process.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 20 年度	600,000	180,000	780,000
平成 21 年度	200,000	60,000	260,000
平成 22 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：母親役割、適応過程、対処パターン

1. 研究開始当初の背景

社会で活躍する現代女性にとって妊娠は、人生の岐路にたつ問題であり、母親になることや児へのアンビバレントな感情は、より複雑で緊張が強いと推測する。母親になることへの心理的対処を明らかにし、妊娠期の看護ケアを検討することが必要である。

研究者は研究 I において、母親役割の同一化と妊婦の対処特性、母親や夫との関係、対児感情との関連を量的研究から明らかにしてきた。しかし、これらの結果は対処結果を示すものであり、対処のプロセスを明らかにすることが必要だと考えた。

2. 研究の目的

母親役割への精神的適応過程における対処パターンを検討するため、本研究においては、母親役割の同一化に焦点をあて、対処のプロセスである感情調整の意味合いを明らかにする。

3. 研究の方法

対象は、妊娠末期の初妊婦 30 名である。以下の測定尺度を用いた質問紙調査と面接調査を行った。

(1) Stress Coping Inventory(SCI) :

2つのステージと 8つの対処型(計画型・対決型・社会支援探索型・責任受容型・自己コントロール型・逃避型・離隔型・肯定評価型)で構成されている。

(2) 対児感情評定尺度：接近感情と回避感情を測定する。

(3) Japanese Prenatal Self-Evaluation Questionnaire(JPSEQ)：評点が高いほど心理社会的適応が悪い。7つの下位尺度があるが、今回は研究 I で関連の見られなかったものは除外し、妊娠の受容、母親役割の同一化、出産準備、実母との関係、夫との関係の 5つの下位尺度を使用した。

(4) 母親役割の同一化に焦点をあて面接を行った。面接時間は 30~60 分である。

調査は北里大学看護学部研究倫理委員会及び調査施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

分析方法：対処特性の統一性を確認するため研究 I の結果と比較した。また、JPSEQ 母親役割同一化の平均値を分岐点とした母親役割準備高群・低群による二群比較を行った。面接調査結果は KJ 法により整理し、専門とする研究者のスーパーバイズを受けた。

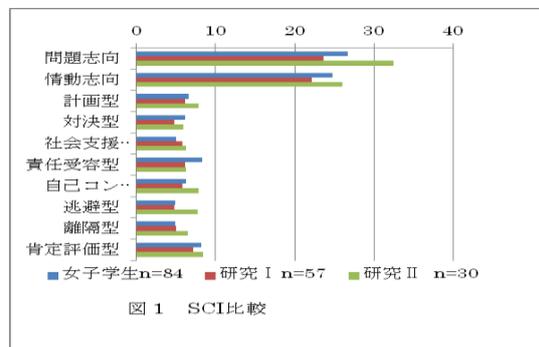
1. 研究成果

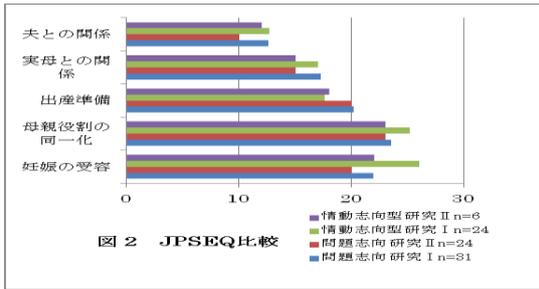
(1) 対象の概要

平均年齢は 30±3.9 才、平均週数は 32±2.3 才であった。全員既婚者であり、専業主婦は 4 名のみであった。

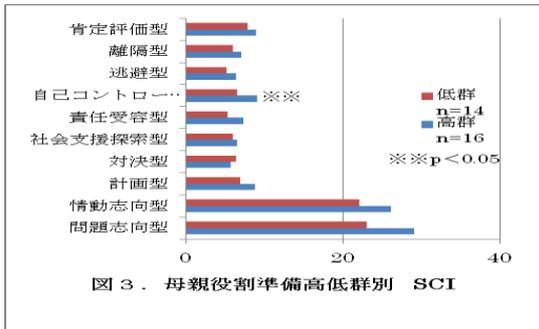
(2) 研究 I との比較

研究 I の結果同様、妊婦の SCI は対決型と責任受容型が低い傾向を示した。問題志向型と情動志向型による JPSEQ の下位尺度比較も基盤研究同様の結果であった(図 1、図 2) また、自己コントロール型の高い妊婦は、児への回避感情が低い傾向を示した。

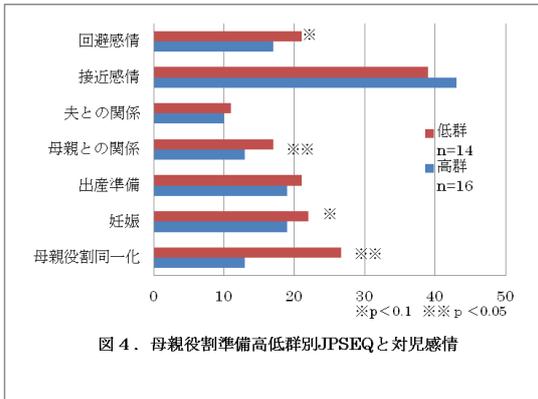




(3) 母親役割準備高群・低群による比較
 ①SCI の各対処型は対決型のみ低群が高群より高い値を示した。その他の対処型はすべて高群が高い値を示し、自己コントロール型で有意差を示した (図3)。



②対児感情では、高群が低群に比べ回避感情が有意に低い結果であった。
 ③JPSEQ の各項目では、妊娠の受容、母親との関係において低群の方が、否定値が高く、有意差を示した (図4)。



(4) 面接調査の結果
 ①カテゴリー分類

面接結果は 254 のコードに整理され、26 のサブカテゴリーから 6 つの主カテゴリー【母親イメージ】【変化する自分】【妊娠中の体験】【考える要因】【対処】【自己の母親像】に統合された。2つの影響要因として<実母との関係><夫との関係>が示された (表1)。

表 1. 面接データの Kategorization

主カテゴリー	サブカテゴリー
母親イメージ	イメージできない
	理想とする母親像
	自分の特性から想像する 育てられ体験
変化する自分	胎児優先に考え、行動する
	子どもへの関心が増す
	他人の気遣いに気づく
	他人を気遣う
	精神状態の変化 情報収集する
妊娠中の体験	仕事中心の生活変化
	胎児との生活を楽しむ
	胎児への否定感情
	妊婦であることでのつらさ
	妊婦としての誇り・実感
考える要因	自己の性格
	妊娠中の対処からの予想
	サポートえられる確信
	見聞きした情報
	変化する自分
対処	自分なりの対処方法
	実母のサポートを得る
	夫のサポートを得る
自己の母親像	自分の特性から想像してみる
	実際に母親になって考える
	想像できない
関連要因	実母との関係
	夫との関係

②妊婦の母親役割への精神的適応過程

多くの妊婦が【自己の母親像】は出産後でないとわからないと回答したが、『育てられ体験』や『理想像』『自分の特性』から母親像を描こうとしていた。また、『妊娠してからの自己の変化』を捉えており、『見聞きした情報』や『妊娠中の対処』『自己の性格』から出産後の生活に対する『自分なりの対処』を考えようとしていた。妊娠期間中の実母や夫のサポートから『サポートを得られる

確信』を持つことで現実的な【対処】を考えていた。

③母親役割準備高群・低群比較

母親役割準備高群と低群を比較すると、『妊娠中の体験』において違いがみられた。高群は、「わくわくする」「楽しくてしょうがない」など肯定的にとらえているのに対し、低群は「胎動が激しく、胎児をどなってしまった」「イライラした」「妊婦生活は苦痛」と否定的に捉える違いがみられた。【考える要因】における実母のサポートに関しては、両群に違いはなかった。しかし、夫のサポートにおいては、高群の方が夫とよく話し合う機会を持っており、妊娠中のサポート状況から夫の『サポートに対する確信』を持っている傾向が示された。そのため、高群は、【対処】においては、『自分なりの方法』で調整すると回答していた。また、高群の中には「がみがみ言うに違いない」「神経質になりそう」「結局、実母に似るに違いない」と回答し、自己の性格的側面を意識した現実的【自己の母親像】を描いているものがいた。

それに比べ低群は、『育てられ体験』に影響された『理想とする母親像』と実際の状況における『理想と現実のギャップ』による葛藤に留まっており、現実的調整までには至っていない特徴が示された。

本研究から多くの妊婦は妊娠期から母親となることに対処しているが、意識的対処となっていないことが考えられた。しかし、自分なりの母親像を描こうとしている妊婦は、現実的対処に向かうことが推測された。また、現実的対処に向かうためには『サポートを得られる確信』が大きく影響することが考えられた。自己の母親像に対し、「出産後でないといけない」とする回答は、妊婦の心理的葛藤状況を示すと思われ、心理的準備が進まない状況は、出産後に対応困難な状況を生むことが考えられた。従って、妊娠期から意識的に準備できるような看護支援を検討することが必要だと思われた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

①島袋香子、新井陽子

母親役割への精神的適応過程における対処に関する検討Ⅱ－母親となる自己の再構成に焦点をあてて－
第52回日本母性衛生学会 2011年9月29日、京都

母性衛生, 査読有, Vo52, No3, p 238, 2011

②及川美穂、島袋香子

妊婦の心理社会的適応状態の分析
－母親役割獲得に焦点をあてて－
第25回神奈川母性衛生学会 2012年2月4日、横浜

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

島袋 香子 (Shimabukuro Kyoko)
北里大学・看護学部・教授
研究者番号：70206184

(2)研究分担者

新井 陽子 (Arai Yoko)
北里大学・看護学部・准教授
研究者番号：90453505